

ヤッシャ

ハイフェッツ

Jascha Heifetz (1901-1987)

学校祭準備のために、練習時間が減り始めている。家庭学習はどうだろう。大切な行事だから頑張ってもらいたいという思いはさておき、練習不足、勉強不足……「気のせいだ」じゃ済まされない。

しかし、せっかくの練習不足、しかもこの練習不足は冬期間の練習不足とは違い、ちゃんとテニスコートがあって、あそこに行けばいつだってボールを打って、それなのに練習ができないというナントモもどかしい練習不足……そこで練習不足の意味についてちょっと考えてみることにした。

1日練習しなければ自分が気づく

2日だと批評家が気づく

3日になれば観客が気づく

(ヤッシャ・ハイフェッツ)

ハイフェッツは20世紀を代表する世界的バイオリニストである。世界随一と称された演奏テクニックの一方で、「表現よりも技術を優先する冷たいヴァイオリニスト」などという評価を受けたこともあった。そんな彼のテクニックが、豊富な練習量に支えられていたことは言うまでもない。

練習量の重要性なら言われなくてもわかっている。3日サボったら練習不足がバレるぞという教訓も、私たちにとってはそれほど重要ではない。しかし「1日練習しなければ自分が気づく」という冷徹な自己分析はスゴイと思う。

岩東テニス部員だって定期考査のときに10日も練習を休めば、その間の練習不足はイヤと言うほど痛感させられる。えっ、痛感しない者もいるのか？鈍感なヤツほどそれに気づくためには、練習不足の時間が長く必要だということなのだろう。しかしハッキリしているのは、ヤッシャ・ハイフェッツもラファエル・ナダルも岩東テニス部員も、練習不足の影響は、本当は1日目から出始めているということ。違うのはそれに気が付くかどうかだけなのだ。付け加えるなら、勉強不足の影響は、本当は1日目から出始めているということ。違うのはそれに気が付くかどうかだけなのだ。

現実をしっかりと見つめなさい。岩東生の現実勉強である。そしてテニス部の現実、8月初めの南北大会と、夏休み明けの秋季大会に他ならない。日常とは違う忙しさの中で、ややもすればそんな大切な“現実”を見失いそうになる自分をつなぎ止める努力を怠ってはならないのだ。

一言、ホンネ言おうと思う。お前たちには伝わらない言葉かもしれないが。

騒がしく落ち着かない“祭”の2週間、短絡した浅い快樂の中で正しく自分を見つめることをすっかり忘れてしまっていた日々のことは、お前達が老人になってから振り返るための、遠い過去の懐かしい思い出としてだけ残しておけばいい。心の目を凝らして見つめなければならない本当の時間を刻む時計の針は、既に刻々と進み始めているのだから。